

白石区幼保小連携推進協議会だより

No.2 (令和3年12月17日発行)
白石区幼保小連携推進協議会 代表者会

令和3年度第2回白石区幼保小連携推進協議会は、10月20日に、札幌大学女子短期大学部 阿部 宏行 教授を講師に招いて、オンライン講演会を行いました。小学校16校、幼保施設26園、83名の参加で行われました。とても実り多い時間になったと思います。講演会では質疑応答を行う時間がありませんでしたので、今回の連携だよりで、**参加者からいただいた質問と阿部教授からの回答**を載せました。(字数が多くて申し訳ありません。)

また、現在、オンライン講演会の動画を貸出中です。1月末まで行いますので、希望される方は、札幌市立きくすいもとまち幼稚園(園長:松澤)までご連絡ください。(電話:873-2285)

オンライン講演会 質問と回答

- ・育みのABC等の小冊子は、どのようにしたら手に入るでしょうか?
→「育みのABC」につきましては、残部がなく、日本文教出版のホームページから小冊子の内容をダウンロードすることができます。その他ABCにつきましては、出版社へ問い合わせください。
- ・園の方から「就学する前にどんなことを指導し、育てたらいいですか?」と質問されたら、小学校ではどのようにお答えするのがよいでしょうか?
→園の先生方や親は「安心してください。小学校できめ細やかな対応をしますよ」という言葉を期待していると思います。目の前の子どもたちの「よさや可能性」を互いに共有できるかがポイントです。「欠けている」「身に付いていない」などのマイナスばかりに目を向けると、どの子も「マイナス」からのスタートになります。生活面での基礎的な社会習慣などの情報の共有は、最低限必要になるかと思えます。特別な支援が必要となる場合については、個人情報の観点からも、「予測」で軽々しく回答できません。専門的な意見などを参考にしながら「情報共有」する必要があります。
- ・今年度の1年生にコロナの影響はあると思いますが?あるとしたらどのようなものが考えられますか?また、その場合の小学校側の配慮すべきことは何ですか?
→このたびの新型コロナウイルスは、不幸中の幸いともいえるべき若年層の重症者が限定的でした。また、保育所や幼稚園などのコロナウイルス対策も行われていて、「新型コロナウイルス」による直接的な影響は少ないといえますが、その背景にある「人間関係」の問題、経済格差や教育格差による影響は、目に見えぬ形で現われることが考えられます。これは単に「子ども」の問題というより、家庭や社会との関連で生じるものといえます。講演でも話しましたように「非認知的な能力」は、目に見えませんが、着実に育っていないと、様々な方面に影響を及ぼします。それを「ICT」などのデジタル機器を用いても限定的な能力しか育ちません。体験的で、直接的な関わりを今一度再考し、「みんなと一緒に学ぶ」ことの意義を見出してほしいと思います。
- ・遊びの中で子どもたちの主体を取り入れていくことはイメージがわき、今後やっていこうと思ったのですが、カリキュラムの中や行事ではどのように取り入れていったらよいのか、よい方法があれば教えていただきたいです。
→行事、カリキュラムありきではなく、子どもの主体性を生かし伸ばしていくためにどのような行事やカリキュラムにすべきかが大切です。この質問を現行の園のカリキュラム改善という視点であれば、子どもとの対話から課題を発見し、考え、実行し、解決する道筋を計画することが、子どもの目線で考えるカリキュラムになるといえます。「アオムシがキャベツにいた!」という発見は、「キャベツ」を植えて育てる先生の見通しをもった「カリキュラム」の「きっかけ」の視点です。子どもは「発見した!」という喜びとともに、「なぜ」や、「どうしたら成虫になるの」など、興味や関心から学びを進めようとしています。ここでは「教える」という視点でのカリキュラムづくりではありませんから、まずは、先生方で、子どもはどんなものに興味をもち「学びを進め」「学び続けて発展していくか」を「それ、ある!ある!」と検討し合う研修を行うことが必要でしょう。
- ・幼稚園と小学校は生活環境ががらっと変わると思いますが、子どもたちが感じるそのギャップを少しでも軽減させてあげるために、幼稚園ではどのようなことをしたらよいでしょうか?
→「変わる」ことは負ではないという意識がまず必要です。環境が変わることで、私たちは環境に馴染むことが要求されます。これは「負」ではありません。新たな希望であり、未知なるものへの挑戦です。それは周りの

大人が、まずは同様な意識を共有した上で、これまでの経験値では対処できないような「不安」を取り除くことです。聞くよりも一見することもいいでしょう。例えば、「保育所や幼稚園にあるトイレと同じだ!」「ホールより大きな体育館があった」など、就学前に近隣の小学校への見学なども、期待の高まりと不安解消につながります。また、小学生との交流から保育所や幼稚園に戻って「小学生のまねごっこ遊び」なども疑似体験することができます。これも「遊び」に替えてしまうのが子どもの発想です。こうして子どもは自身で学んでいきます。

- ・小学校への接続において、幼児期に大切にすべきことや、ここまではできていてほしいことがありましたら、教えていただきたいです。

→まずは、保育所や幼稚園での生活を充実させることが大切です。子どもの不安感を「あおる」必要はありません。「自分でできる」「自分から進んでする」「自分のことは自分で行う」「友だちと学ぶことは楽しい」「ルールを守る」など、その基礎的な「非認知的な能力」の育成が、幼児教育から高等学校に至るまでベースになります。「当たり前前」のことが「当たり前」にできる」ともいえるでしょうか。

- ・ファシリテーター、クリエイターの2つをバランスよく行っていく中で、現場の先生はどのような意識をもち、また、どのような動きに注意していくのがよいでしょうか

→子どもが「おもしろいことやっている」という状況は、「子どもが学んでいる」という受け止めをすることから始まります。それは「きっかけ」（園内の環境構成や材料などから、子どもが発見して、学びの対象にする）があることです。また「いざない（みちびき）」（おおよその計画の基に教師によるなげかけや提案する。例：春先の畑の探検、秋の落ち葉あつめ、冬の雪遊びなど）があります。これらを、園内の先生方で組織的に構成するなどが「クリエイター」と呼ばれる先生の役割といえます。ファシリテーターの意味は「子どもの目線で、子どもの志向を捉えつつ、子どもと同化することで活動が活性化すること」といえます。ですから、活動の事前にあるクリエイターと、活動途中でのファシリテーターの役割ともいえます。もちろん、活動途中であっても、活動を活性化す「媒体」を投入して、化学変化させることはファシリテーターでもあり、クリエイターでもあるといえます。

- ・春、夏のよい自然遊びがあれば知りたいです。 ※大学の授業「自然と遊び」（自作のテキスト）Q&Aより抜粋

Q：周りに自然がない都市部で、自然とふれあうことができない。

豊かな自然があるところには、魅力もあります。でも、都市部でも、見慣れた散歩道にも、自然との出会いはあります。硬いアスファルトを打ち破って芽をだすタンポポ、軒先の庭に咲く草花、スズメやカラスも飛び回って生きています。見上げた空には、面白い形をした雲、落ち葉を舞い上げる風など、目を向けることで、様々な自然との出会いが生まれます。

Q：いつも同じ散歩コースなので変えた方がいい？

いつも同じ散歩コースなのでマンネリと感じている保育者の意識の問題です。同じ散歩コースでも、季節による違いや、いつも通るコースだからこそ、変化に気付くことができます。マンネリを解消するには、意識の向け方を変えて見ることです。同じ場所でも、時間や日によって違いがありますし、散歩する子どもたちの視線の先には違いがあります。コースを変える際には、事前に下見するなど、安全の確保には十分配慮することが大切です。

Q：「秋をさがそう」としたけれど、秋に関係のないものも？

季節を区別するのは、大人でも難しいですね。「秋だから落ち葉」など大人の「季節」の概念もつくられたものです。そのとき子どもが全身で感じたことやものが大切です。季節の中で「感じたこと」「気づいたこと」を保育者が見出し認めてあげる姿勢が重要です。子どもは季節を体で感じ、大人は頭で捉えようとしているのです。

Q：雨の日の散歩って大変そう。必要なの？

季節や雨の程度にもよりますが、長靴を履いて散歩する体験は、非日常のできごとをもたらしてくれます。雨粒や雨音、葉を揺らす雨など、ふだんとは違う様々な様子を見せてくれます。水たまりも、子どもたちは大好きです。天気の良い日とは違う雨の日の散歩を楽しみましょう。

散歩から発見したこと、見つけたものから「学び」が始まると考えることができます。身の回りには、子どもの「好奇心」を誘発するものがたくさんあります。あまり先生が先行しすぎて、学びの機会をそぎ落としているかもしれません。

第1回白石区幼保小連携推進協議会（オンラインブロック交流）で話し合ったように、子どもたちのために、現状でできる幼保小連携を積極的に推進していくようお願いいたします。また、令和3年度白石区幼保小連絡会（電話による引継）は、令和4年1月17日（月）に行います。詳細は幼児教育センターから後日お知らせいたします。